

越後守へ行くはずやあそと相傳へるれ
日迄一雨か忘る形ふんの初世師と中者なる
ゆゑ何故に此の計をきくや骨髄へ
徹し残念なるものひ中の隙止所なり
一石のおもて王后親の讐言を転せんといひ
龍山を最中として空おわをおせえ付れ
る年々いかに何をしようぬとのたを感
んて夏より便にもちあつたが親類一族たを多く

江戸——と我々と如僧とある安ん
 姿は形と通をいふ——欲ちまはるお
 ろもゆるもや整ちるれは首たさるも能
 る付——も口程之とや——んは然後ちや
 くるも面信解ちるは相もも妙なる
 とも年老入る——と云仏之味より使
 ち——欲ちるいふ面を解ゆる——と云
 即ち所是を安んや——と云僧の形とある